

飯田市における獣害対策の諸問題 －駆除死体の処理方法に着目して－

橋本 操・碓井達哉・劉 珂

キーワード：獣害，駆除，処理方法，山肉，飯田市

I はじめに

I-1 研究の背景と目的

イノシシやシカといったシシ（猪鹿¹⁾）と呼ばれる野生動物は、日本列島で稲作が行われて以来、天敵とされてきた。これらの野生動物を追い払うための工夫として、銃やわなによる駆除、音や臭いによる追い払い、田畑や集落などに対して野生動物が近づけないようにするシシ垣などの方法が発達した（浦山，1999；矢ヶ崎，1989・2001；野本，1984）。江戸時代におけるこれらの対応策に関する資料は貴重であり、当時の野生動物への対応策や知恵、集落運営の方法などを学ぶことができる（寺本，2010）。しかし、野生動物は、銃の発達や毛皮や肉の需要の増加に伴い、その数が減少し、それとともに野生動物による被害（以下、獣害）も減少していった（田口，2004）。

一方、近年では獣害が再び顕著になっている。それまで減少していた野生動物を保護管理するようになり、野生動物の毛皮や肉が別の繊維や家畜の肉に代わってきたことで、野生動物の個体数が回復したこと、狩猟者の高齢化や減少により狩猟圧が弱くなったこと、森林破壊などにより野生動物の生息環境が悪化し、人里へ餌を求めて出没するようになったことなどが原因として挙げられている。それに対して、全国で行われている対策は有害駆除（以下、駆除）が中心であり、その駆除

頭数は年々増加傾向にある。それにより生じる野生動物の死体の処理方法は、獣害対策を行っていく上で課題となっている。その中で、野生動物の死体の処理方法として、ジビエとしての食利用に注目が集まっている。そもそも、イノシシなどの野生動物の肉（以下、山肉²⁾）の商品化は、少なくとも江戸時代にさかのぼることができるが、各地で大衆化したのは、戦後の高度経済成長期以降、レジャーブームの高まりや都市化による自然への郷愁の中で生じてきた（高橋，1980）。これにより、山肉を提供する宿泊施設や飲食店が現れ、「野生の味」を楽しむため西日本を中心にイノシシの飼育も行われてきた。この頃、全国と同様に飯田市のイノシシ肉もまた「深山のシシ肉」として注目されるようになった（浦山，2001）。しかし、その後は高価で珍味である山肉の需要が減少していったため、山肉の人気は一部の消費者を除いて、全国的に下火になったものと考えられる。

以上を踏まえ、本稿では長野県飯田市を事例地域に獣害対策として駆除された野生動物の死体の処理方法に着目し、野生動物による獣害とその対応策について分析することで、その諸問題を明らかにすることを目的とする。

I-2 研究対象地域

研究対象地域の飯田市は、長野県の南部に位置し、長野市、松本市、上田市に次ぐ人口規模で4

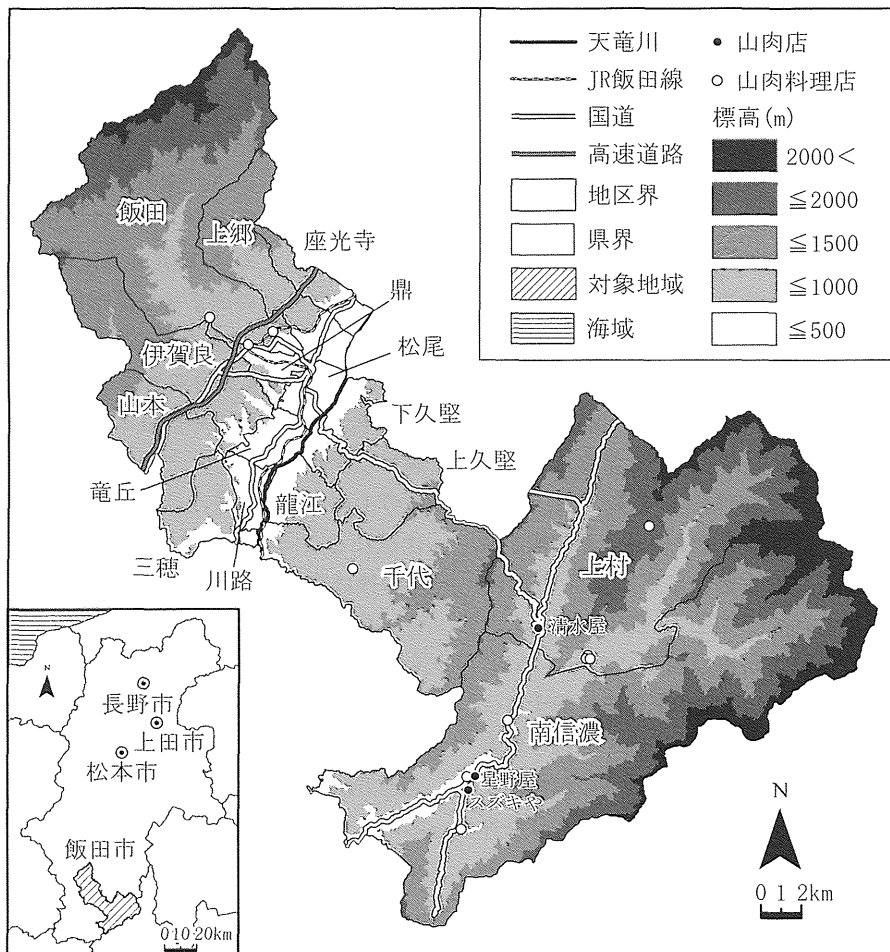
番目に大きい市である（第1図）。東は赤石山脈、西は木曽山脈に挟まれ、北から南へ流れる天竜川により谷地形が形成されている。この天竜川により市内は竜西、竜東地域に分けられ、さらに峠を隔てた市南東部の遠山地域に分かれている。この遠山地域は上村・南信濃地区からなるが、2005年に飯田市に合併された地区である。これにより市内は、市街地に近い竜西地域（座光寺地区、上郷地区、飯田地区、伊賀良地区、山本地区、川路地区、三穂地区、竜丘地区、鼎地区、松尾地区）、天竜峡やリングの観光農園といった観光施設を有し傾斜地である竜東地域（下久堅地区、上久堅地区、龍江地区、千代地区）、山間部である遠山地域（上

村地区、南信濃地区）の旧集落単位である16地区からなる。本研究では、この16地区ごとの獣害およびその対応策について取り上げることとする。

また、飯田市は、現代まで狩猟が行われてきた背景から、一般家庭でも山肉を食べる習慣が残ってきた地域である（市村，2002）。そのため、飯田市内には、山肉屋³⁾や山肉料理屋が存在してきた。現在、飯田市には、遠山地域を中心に数店の山肉屋が存在しており、現在も営業している。

I-3 研究方法

飯田市の獣害とその対応策について検討するため、まず現在の獣害対策の背景となっている近世



の獣害とその対応策について取り上げる。これについては、郷土資料などより分析を行った。また、飯田市は、長野県の他地域にもみられるシシ垣が存在しており、一部ではあるが修復・保存が行われているため、その現地調査も行った。次に、現代の獣害とその対応策について、飯田市の統計資料によりその傾向について把握し、各16地区で獣害対策を行っている有害鳥獣対策協議会（以下、協議会）の役員に対する聞き取りおよび調査票による調査から、詳細な被害状況、活動内容、対策の課題などについてまとめた。さらには、課題の一つである死体の処理方法についても、その担い手である山肉屋へ聞き取り調査を実施した。これらの調査は、2011年10月23日～10月29日および2012年5月27日～6月2日に実施した。そして、これらの調査分析から、特に死体の処理方法に着目しながら、飯田市の獣害対策の諸問題について考察を行った。

II 近世における獣害とその対応策

江戸時代においては、現在のように火器の使用が進んでおらず、山も樹木で茂っていたことから、野生動物による農作物への被害は大きく、その対策は農民の大きな課題であった。

獣害について、北原（1932）では「脇坂公は元和3（1617）年から寛文12（1672）年まで飯田城主として、主に龍西（天竜川の西）地域の阿智川以北、片桐松川まで、58,089石を領して仁政を施した。池を掘って灌漑の便を計り、猪土手を築造し、又、美濃国恵那郡樋畑村から獵師熊谷というものを招いて熊の害を除いた。」とあり、17世紀にはすでに獣害が問題とされていたことがわかる。

こうした被害への対策としては、猪小屋を作り夜通し火を灯し、板等を叩き、声をあげるという事が行われていた（向山、1984）。また、畑の周りにはシシ垣がつくられた。シシ垣とは、野生動物の田畑への侵入を防止するために、田畑の周辺に築かれた木柵、石垣、土塀などの遺構のことを

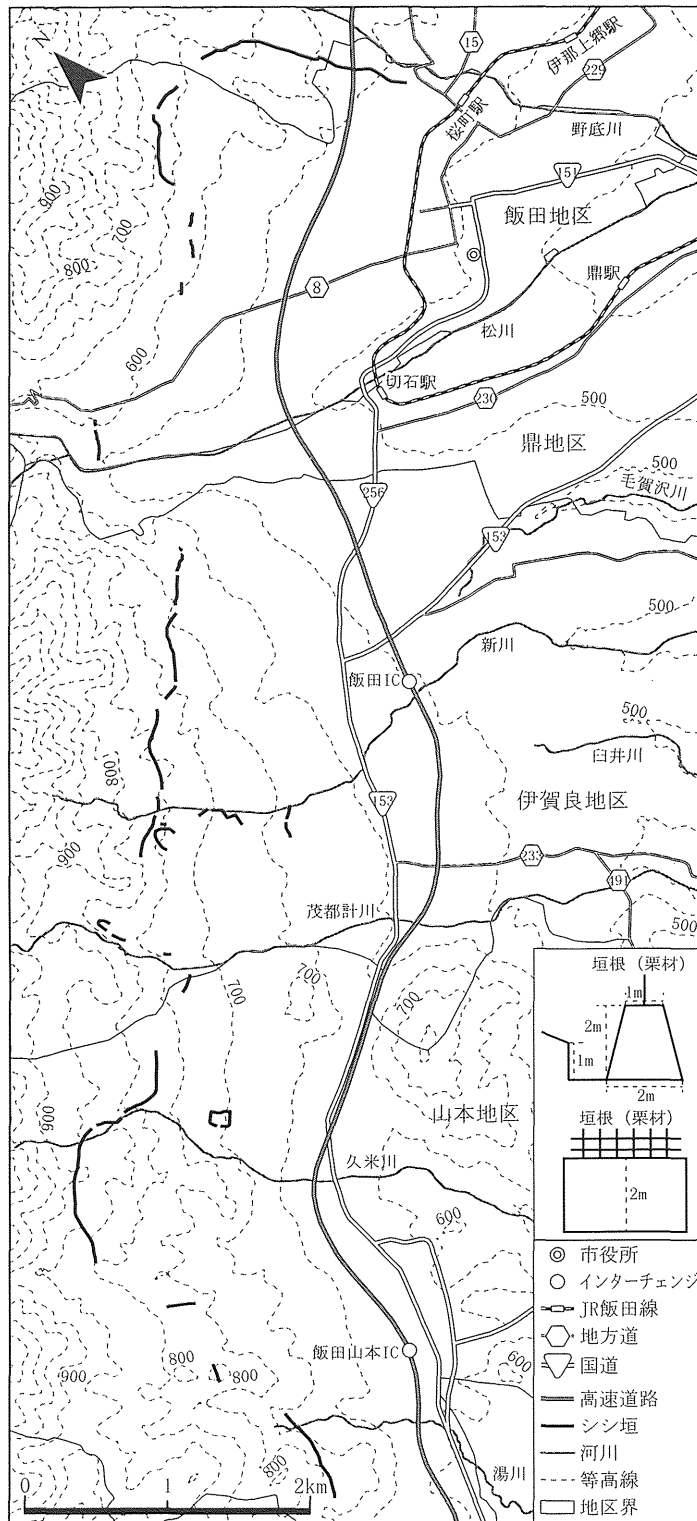
指し、一般にはシシ垣（猪垣、鹿垣、猪鹿垣とも書き、ししかべ、いがきなどその他の呼び名もある）と称する他、猪土手、猪鹿除（ししよけ）など多様な呼称がある（矢ヶ崎、1989）。

飯田市のシシ垣の構造について、向山（1984）は「山麓（扇状地）の原野と開墾地との境を劃し、傾斜面の上部を1メートル位掘り下げて、此土を下部に盛り上げ、高さ大凡2メートル、上幅1メートル、下底2メートル位の土手を築き、その上に栗材で矢來状の垣を造った。」と記している。また、北原（1932）より、当時のシシ垣の位置と現在の道路を第2図に示す。一部が現在の高速道路により分断されてしまっているものの、山麓で北東から南西にかけて断続的にシシ垣が存在していたことがわかる（写真1）。なお、図中のシシ垣の中には現存していないものもある。

ところが、シシ垣による対応策だけでは大きな効果は得られなかったため、狩猟者を雇い、銃により野生動物を駆除する方法もとられていた。こうした狩猟方法について、南信濃村史編纂委員会（1976）によると、イノシシの狩猟は犬を連れ2、3人で行っており、イノシシが通る道で犬を放し、追い出したイノシシを銃で三方より撃つという方法がとられていた。

狩猟に関する記述としては、狩猟にかかる費用について、上久堅村誌編纂委員会（1992）の中に柏原山分（現上久堅地区）の記録があり、これによると、1800（寛政12）年には村入用に対する対策費用の割合が7割近くを占めている。その後徐々に割合は小さくなり、1833（天保4）年には1割を下回っていることから、イノシシやシカが減少し被害が小さくなったものと考えられる（第1表）。

また、獵師鉄砲の増減の記録もあり、柏原村の鉄砲所持数について、第2表に示す。1692（元禄5）年の時点では5人の銃所有者がいたが、1846（弘化3）年には8人に増えていた。この間に死屍防止にかかる費用が縮小しており（第1表）、狩猟の成果があったことがわかる。その後、1852（嘉永5）年に銃所有者が4人に減少しており、イノ



第2図 飯田市におけるシシ垣の位置

(北原 (1932), 基盤地図情報により作成)



写真1 修復されたシン垣 (2011)
(2011年10月 劉撮影)

シンやシカの被害が減ったことで狩猟の規模も縮小したと考えられる。また、千葉(1966)および伊賀良村史編纂委員会(1973)によると、北方村(現在の伊賀良地区)で1744(寛保4)年に、猟師を雇うための費用について組による意見の対立が起こったという記録があり、イノシンやシカの対策にかかる費用が村入用にとっても大きな問題であったことがわかる。

狩猟で扱う銃に関して、当時は、村内に鉄砲鍛冶があり、鉄砲の修理や販売が行われていた。しかし、鉄砲の改造・販売を勝手に行う事は許されていなかった(上久堅村誌編纂委員会, 1992)。

こうした狩猟やシン垣の記録からもわかる通り、近世から野生動物による農作物等の被害は顕

第1表 猪鹿防止のための諸費用(柏原山分)

年号	猟師		猪		鹿		火薬 玉薬(文)	猪鹿防 費用(文)	村入用に対 する割合(%)
	日数	金額(文)	頭数	褒美(文)	頭数	褒美(文)			
1786(天明 6)								24,200	26,6
1792(寛政 4)								8,000	13,2
1793(" 5)								10,500	12,6
1795(" 7)								12,000	14,5
1796(" 8)								12,500	23,6
1800(" 12)	10人	15,500	28	25,200	20	14,000		54,700	67,8
1804(文化 1)	100日	10,000	16	13,600	15	9,748	3,236	36,584	49,0
1805(" 2)	130日	13,000	19	15,200	17	10,200	2,400	40,800	48,1
1806(" 3)	130日	13,000	17	13,600	25	15,000	2,500	44,100	51,0
1807(" 4)	130日	13,000	14	10,400	21	12,600	2,500	38,500	49,0
1809(" 6)	130日	13,000	14	10,400	25	15,000	2,500	40,900	43,7
1810(" 7)	56日	5,600	10	8,000	20	12,000	1,600	27,200	35,1
1811(" 8)	56日	5,600	12	9,600	20	12,000	1,600	28,800	33,1
1813(" 10)		6,000	14	11,200	20	12,000	2,600	31,800	33,0
1814(" 11)		4,000	11	8,800	15	9,000	2,600	24,400	29,3
1815(" 12)		4,000	11	8,800	15	9,000	2,600	24,400	28,1
1816(" 13)		4,000	11	8,800	15	9,000	2,600	24,400	28,0
1817(" 14)		2,800	11	8,800	17	10,200	2,464	24,264	35,0
1823(文政 6)			11	8,800	13	7,800	2,800	19,400	33,5
1824(" 7)			11	7,700	11	6,600	2,800	17,100	33,3
1825(" 8)			12	7,200	18	9,000	2,800	19,000	24,4
1827(" 10)		2,800	15	9,000	17	10,200	2,400	23,900	31,0
1828(" 11)			11	8,800	13	7,800	2,700	19,300	31,0
1829(" 12)			8	4,800	9	5,400	1,700	11,900	15,3
1833(天保 4)			3	2,400	6	3,600	1,000	7,000	8,7
1837(" 8)				猪1, 鹿1				800	0,6
1838(" 9)				猪鹿5疋				1,000	1,3
1841(" 12)				猪鹿8疋				1,400	2,4
1842(" 13)				猪鹿6疋				1,200	2,6
1843(" 14)				猪鹿7疋				1,400	4,3
1844(" 15)				猪鹿12疋				3,200	3,4
1845(弘化 2)				猪鹿8疋				1,400	1,9
1846(" 3)								0	0
1847(" 4)								0	0

注) 1837年以降は猪鹿の個別の褒美金や頭数が不明のため、一括で表記する。

(上久堅村誌編纂委員会(1992)により作成)

第2表 柏原村における鉄砲所持（猪鹿防止用）

1692（元禄5年）	1846（弘化3年）	1852（嘉永5年）	
玉目	持主	玉目	持主
4匁	太左エ門	3匁	久右衛門
3匁5分	七三郎	3匁	七右衛門
3匁3分	喜右衛門	3匁	嘉平
3匁	留兵衛	3匁	要蔵
2匁8分	惣右衛門	2匁8分	勝右衛門
		2匁8分	庄七
		2匁8分	治右衛門
		2匁8分	弥五右衛門
		2匁8分	市郎右衛門

（上久堅村誌編纂委員会（1992）により作成）

著であり、現在行われている対策の多くはこの頃より続けられてきた方法である。対策の効果もあり、幕末期にはシシの被害は減少したとされる。千葉（1961）も長岡村（現箕輪町）におけるイノシシやシカの出没を、18世紀終わりまでをきわめて多い時期、19世紀前半の減少期、19世紀後半の絶滅期の3つに区分した。飯田市についても、狩猟にかかった費用や猟銃の所有数の推移から同じような傾向がみられる。しかし、現代において再び被害が深刻化している。

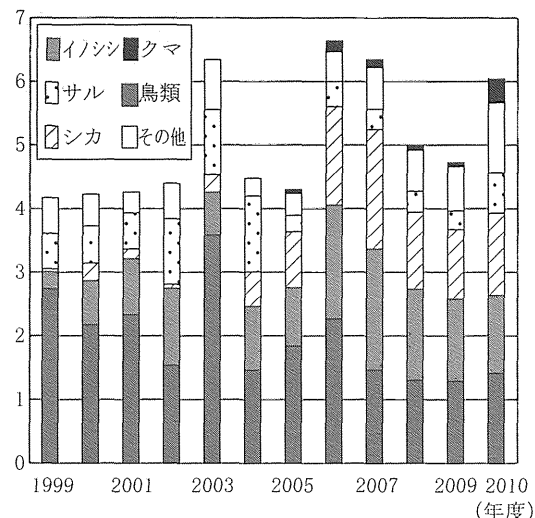
Ⅲ 現代における獣害とその対応策

Ⅲ-1 飯田市全体の被害および対応策

1999～2010年度における野生動物による農業被害金額は、変動しながら一定に推移している（第3図）。特に、イノシシ、ニホンジカ（以下、シカ）、ツキノワグマ（以下、クマ）による農業被害は増加傾向にある。2006年と2010年にクマの人里への大量出沒が長野県で報告されており、飯田市においても被害金額が多くなっている。最も被害金額が多いのはシカであり、イノシシ、鳥類がそれに次ぐ。また、1994～2010年度の林業被害金額の推移は、2001年にピークとなり、その後減少し、約1.2億円の水準で推移している（第4図）。2004年度には、一度5,000万円以下に被害金額が下がったが、2005年度から飯田市に上村、南信濃村が合併し、現在の上村地区、南信濃地区となったため、1998年度以前の水準にまで戻っている。ここから、上村地区、南信濃地区で林業が盛んであり、被害

が大きいことがわかる。獣種別の被害をみると、シカによる被害が最も多く、次いでクマとなっている。

（千円）



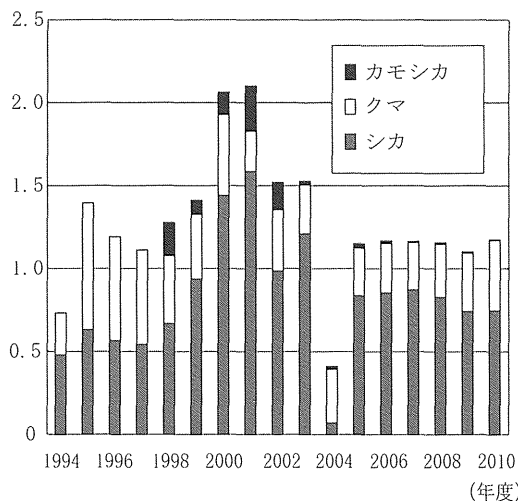
第3図 飯田市における野生動物別農業被害金額の推移（1999～2010年度）

注1）2005年度より上村地区、南信濃地区を含む。

注2）1999～2004年度は、その他にクマを含む。

（「飯田市の農・林被害額」により作成）

（億円）



第4図 飯田市における野生動物別林業被害金額の推移（1994～2010年度）

注）2005年度より上村地区、南信濃地区を含む。

（「飯田市の林業被害額の推移」により作成）

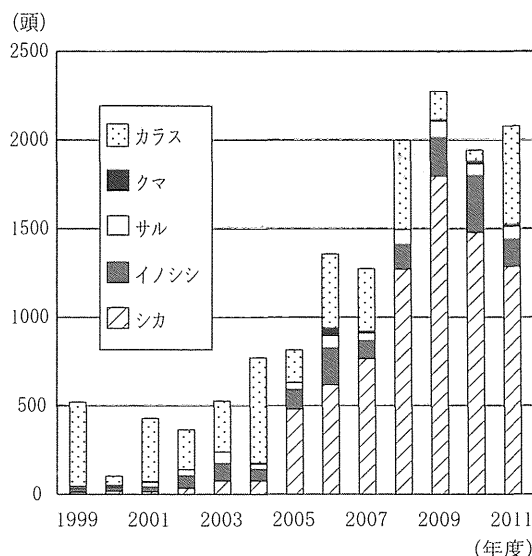
第3表 飯田市の鳥獣被害対策事業（2011年度）

事業名	予算額(円)	内容
捕獲委託	2,163,550	①捕獲業務1件当たり10,000円×145件の支払, ②保険・講習料3,550円×201人の支払
捕獲報奨金	17,840,000	シカ14,000円/頭, イノシシ12,000円/頭, サル12,000円/匹, クマ12,000円/頭, カラス600円/羽の支払
檻・罠購入設置	1,500,000	サル捕獲用檻5基, スプリングわな150基の購入と貸出
被害防止犬養成事業	405,000	モンキー・ドッグ養成1頭 50,000円×6ヶ月, 現地訓練費105,000円の支給
電気柵資材購入費補助金	1,000,000	各地区対策協議会設置費用の4/10以内, 限度額10万円の支給
被害防護柵資材購入費補助金	300,000	農家対象（波トタン・ネットなど）設置費用の4/10以内, 限度額3万円の支給
鳥獣捕獲従事者支援事業	2,300,000	狩猟免許等の新規取得, 免許更新支援補助
地域でまとまった鳥獣被害対策支援事業	-	地域でまとまり, 鳥獣被害にあいにくい環境づくり （学習会や先進地視察等）を進める支援
里山緩衝帯整備事業	5,000,000	上飯田, 山本, 南信濃の3地区の藪などの整備

（飯田市の「平成23年度飯田市の鳥獣被害対策事業」により作成）

飯田市では、獣害対策事業として、①捕獲委託、②捕獲報奨金、③檻・罠購入設置⁴⁾、④被害防止犬養成事業⁴⁾、⑤電気柵資材購入費補助金、⑥被害防護柵資材購入費補助金、⑦鳥獣捕獲従事者支援事業、⑧地域でまとまった鳥獣被害対策支援事業、⑨里山緩衝帯整備事業を行っている（第3表）。その内容は、駆除やモンキー・ドッグというサルの追い払い犬の養成、電気柵や防護柵を設置するための補助金や奨励金の交付、捕獲檻や罠の購入と貸出、狩猟免許などの新規取得や免許更新の支援補助、学習会や先進地視察などの支援、緩衝帯を作るための藪などの整備である。これらの事業を活用し、実際に獣害対策を実施しているのは、各16地区における協議会を中心とした住民である。各16地区の協議会による獣害対策については、Ⅲ-2で詳しく述べる。

第5図は、飯田市における1999～2011年度の野生動物の駆除頭数の推移を表す。1999年度の時点では、カラスの駆除頭数が最も多かったが、2005年度からシカの駆除頭数が急増した。また、クマについては、1995年度から長野県では「ツキノワグマの保護管理計画」を策定し、年間の捕獲数を規制するようになったため、年間の駆除・狩猟頭



第5図 飯田市における野生動物の駆除頭数の推移（1999～2011年度）

注1）狩猟期間中に狩猟として捕獲したものは含まない。

注2）2005年度より上村地区、南信濃地区を含む。

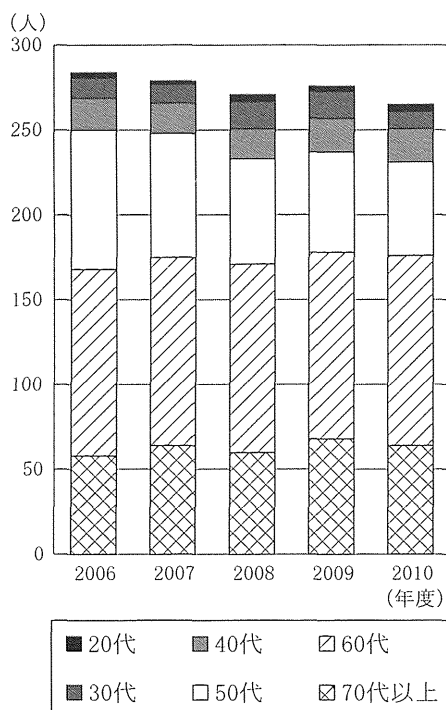
（飯田市の「飯田市捕獲頭数」により作成）

数については、限られた数となっている。クマの駆除や狩猟での捕獲に関しては、各地区が飯田市に申請し、飯田市を通して長野県へ申請され、県

により各地区の捕獲頭数が決定される。しかし、2006年のクマの人里への大量出没の際には、他年に比べ駆除頭数が多くなった。これらの駆除・狩猟を行う担い手は、飯田市内の狩猟者である。飯田市には、飯田市猟友会が存在する。飯田市猟友会は、長野県猟友会の支部である飯伊連合猟友会（飯田市および下伊那郡の連合猟友会）に属し、各16地区に居住している狩猟者が地区猟友会を結成し、活動を行っている。2006～2010年度の飯田市の狩猟者数の推移は、徐々に減少傾向にある（第6図）。年齢構成は、50代以上がほとんどであるが、20代～40代の狩猟者も少数だが存在する。他の地域でも、駆除を担う狩猟者不足が問題になっているが、飯田市も同様の傾向がある。

Ⅲ－２ 各地区における被害とその対応策

飯田市は、旧集落を単位とした16地区に分けら



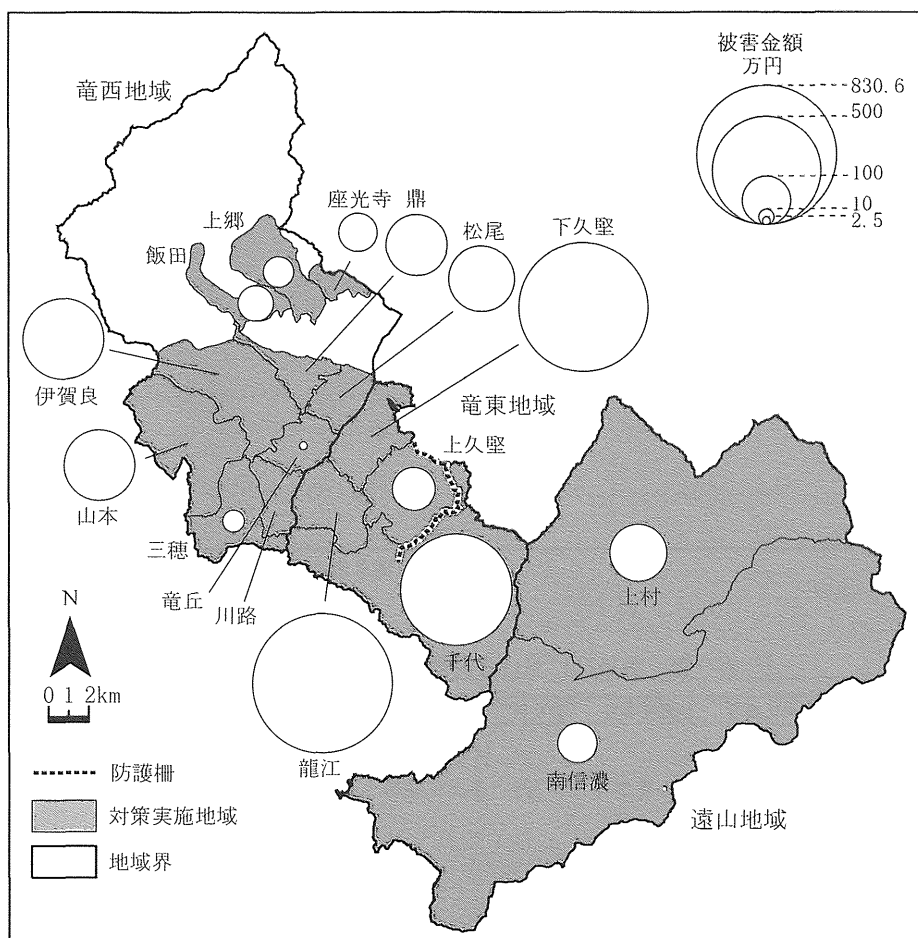
第6図 飯田市における狩猟者の年齢構成と人数の推移（2006～2010年度）

（飯田市の「猟友会の支部別構成人数表（平成16～20年度）」により作成）

れており、それぞれが獣害対策を行っている（第7図）。各地区は、獣害対策実施地域を飯田市に申請し、その地域を中心に駆除などの対策を実施している。また、16地区で農業被害金額が最も多いのは、龍江地区、次いで下久堅地区、千代地区となっており、竜東地域で特に農業被害が大きい。竜西地域においては、山に近い集落である伊賀良地区や山本地区などで被害が多くなっている。また、遠山地域は、山間部の集落のため、産業としての農業というよりは家庭菜園や自家消費のための農業が行われているため、被害金額が少なくなっていると考えられる。これら16地区の獣害対策を実施している協議会の役員に対して、各地区の被害内容、協議会の構成、協議会の活動内容、対応策の課題・要望について聞き取りおよび調査票による調査を実施した。

各地区の被害内容と被害を起こしている野生動物の種類を第4表にまとめた。各地区で共通に起きている被害としては、農作物の食害である。家畜の食害が起きているのは、伊賀良地区、山本地区のみであった。また、住居等への侵入・破壊については、竜西地域で特に起きている被害である。植物の剥皮被害は、座光寺、上郷、飯田、下久堅、千代、上村、南信濃の各地区で起きており、これらの地域は山に近く、地区の財産区の共有山林や木材としての樹木が被害にあっていた。被害を起こしている野生動物の種類は、市街地に近い竜丘、鼎、松尾地区などでは、イノシシ、シカ、クマといった大型の野生動物の出没はみられず、ハクビシンやタヌキ、キツネといった中小型野生動物となっている。また、竜東地域では、シカ、クマによる被害が中心である。これは、野生動物の生息分布に影響していると考えられる。

これらの被害には、各地区の協議会が中心となって対応を行っている。長野県では、2005年の長野県第10次鳥獣保護事業計画の策定により、各市町村において協議会（市町村によってその名称は異なる場合がある）を設置し、獣害対策を実施することになっている。飯田市の場合、飯田市鳥獣対策協議会があり、その下に各地区の協議会を



第7図 各地区の獣害対策実施地域（2012年）と地区別農業被害額（2009年度）
（飯田市の各地区の対策実施地域図、「地区別農業被害（平成21年度）」により作成）

設けることで、各地区単位で対応を行えるようにしている。協議会員の構成は、地区ごとに異なっている（第5表）ものの、ほとんどの地区では、JAの支部の獣害対応職員が中心であり、農業従事者、猟友会会員などをまとめている。中には、上村地区のように猟友会が中心となっていたり、上久堅地区のように、協議会の中に農業振興会議、まちづくり委員（自治会会員）、集落の区長、産業委員など他の役員も含まれており、協力している場合もある。上村地区の場合、飯田市全体で協議会ができる以前から、シカによる獣害が問題となっており、それに対応するため猟友会で独自に協議会を設けていた。その後、2005年に飯田市全

体でも協議会を設置するにあたり、以前からあった協議会が継続して役を担ったため、猟友会が中心となった組織となっている。

各地区の協議会の活動内容は、駆除と見回りがほとんどである（第6表）。上久堅地区においては、協議会と中山間地域等直接支払推進協議会により、地区で大規模な防護柵が設置されている（前掲、第7図、写真2）。これは、林道に沿って設置されており、設置、修理、管理が容易であるようになっている。また、田畑の近くに設置していないため、野生動物を誘引する要素（農作物など）を排除することに成功している。他地域における防護柵や電気柵の設置・管理については、個人の

第4表 各地区における被害内容および被害を起こす野生動物の種類（2012年）

地域	地区	被害内容						被害を起こす野生動物の種類									
		農作物 被害	田畑等 破損	植物剥皮	家畜被害	農作物等 いたずら	住居等侵 入・破損	その他	イノシシ	シカ	サル	クマ	ハクビ シン	タヌキ	キツネ	鳥類	その他
竜 西	座光寺	○	○	○		○	○		○	○	○	○	○				
	上郷	○	○	○		○	○	ハウス等 農業施設	○	○	○	○	○	○		○	
	飯田	○	○	○		○	○		○	○	○	○	○	○			
	伊賀良	○	○		○		○		○	○		○	○	○			
	山本	○	○		○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	
	川路	○								○							
	三穂	○	○			○			○	○			○	○		○	
	竜丘	○					○						○	○		○	
	鼎	○	○				○						○	○		○	モグラ
	松尾	○					○						○	○		○	
竜 東	下久堅	○	○	○		○			○	○			○				
	上久堅	○					○		○	○			○				
	龍江	○	○			○	○		○		○						○
遠 山	千代	○	○	○		○			○	○		○					
	上村	○		○					○	○	○	○	○				アナグマ
	南信濃	○		○				養蜂	○	○	○	○	○		○		

（聞き取りおよび調査票による調査により作成）

第5表 各地区における協議会員の構成（2012年）

地域	地区	農業従事者	林業従事者	会社員	役場職員	JA職員	猟友会	その他
竜 西	座光寺	○				○		自治会
	上郷	○				○		
	飯田	○				○		
	伊賀良	○				○	○	農業委員，まちづくり委員
	山本					○	○	農業委員
	川路							
	三穂	○		○		○		
	竜丘	○		○		○		自営業
	鼎	○			○	○		まちづくり委員
	松尾	○		○		○		自営業
竜 東	下久堅	○						
	上久堅	○				○		農業振興会議，まちづくり委員， 13集落区長，産業委員
	龍江	○		○		○		
遠 山	千代	○	○	○		○		
	上村						○	
	南信濃	○				○	○	

（聞き取りおよび調査票による調査により作成）

農業従事者の田畑周辺に設置するにあたり，補助や協力を行っているものである。また，これらの活動の中で特徴的なのは，上郷，飯田地区で行われている慰霊祭である。これは，駆除により殺した野生動物の霊を慰めるもので，駆除による狩猟者の安全祈願と精神的な負担を和らげる意味も兼ねている。

Ⅳ 飯田市における獣害対策の課題と駆除死体の処理方法

Ⅳ－1 対策の課題と死体の処理方法

前章で述べた獣害対策の実施効果と課題について，第7表にまとめた。被害が減少している地区は，下久堅，上久堅，千代，上村地区であった。しかし，その他の地区では，対策を実施しているが被害が以前と変わらず起きており，伊賀良，山

第6表 各地区における協議会の活動内容（2012年）

地域	地区	対策方法								集会	対策費用		
		有害駆除	見回り	防護柵 設置	防護柵 管理	電気柵 設置	電気柵 管理	耕作放棄地 の整備	その他		市役所・ JA支給	協議会 会費	猟友会費
竜西	座光寺	○	○							○			
	上郷	○	○	○	○				慰霊祭	○	○	○	
	飯田	○	○						慰霊祭	○	○	○ (会員のみのみ)	
	伊賀良	○	○			○	○			○	○		
	山本	○	○			○	○			○	○		
	川路												
	三穂	○					○				○		
	竜丘	○									○		
	鼎	○								○	○		
	松尾	○									○		
竜東	下久堅	○								○	○	○ (地区全戸)	
	上久堅	○	○		○	○		○ ³⁾		○	○ ¹⁾	○ (¥300/全戸)	
	龍江	○	○							○	○	○ (会員のみのみ)	
	千代	○	○	○	○					○	○	○ (地区全戸)	
遠山	上村	○	○					○ ³⁾	PP テープ ⁴⁾	○			○ ³⁾
	南信濃	○						○ ³⁾		○	○		

注1) 中山間地域等直接支払推進協議会費（国費）の一部を使用している。

注2) 狩猟時の昼食代として500円/日の補助金を支給している。

注3) 里山整備事業として、飯田市に申請し、整備を行っている。

注4) PPテープは、長野県で実施している事業である。PPテープを樹木の周囲に巻きつけることで、野生動物による樹木の剥皮を防ぐ。

（聞き取りおよび調査票による調査により作成）



写真2 上久堅地区の防護柵（2011）

（2011年10月 劉撮影）

本地区においては、むしろ増加していた。また、被害が減少している地区であっても、その対策に課題を抱えており、それは特に対策を実施する担い手の不足、駆除により発生する死体の処理方法

である。

そこで、対策を実施する上で、大きな課題の一つとなっている死体の処理方法についても協議会役員へ尋ねた（第8表）。死体の処理方法としては、ほとんどが家庭での消費と土に埋める処理であった。また、山肉屋・飲食店・宿泊施設へ売却する地区も一部存在していた。ただし、家庭での消費、山肉屋などへの売却ができるのは、イノシシ、シカ、クマといった大型野生動物のみであった。土に埋める方法をとっているのは、これらの大型動物の他、サル、ハクビシン、タヌキ、キツネなどの中小型動物やカラスといった鳥類となっている。これは、大型動物など人間が山肉として食べられる野生動物以外は、食べることで処理することができないためである。家庭での消費については、聞き取り調査を行った伊賀良、上郷、龍江、上村地区などで食べきれなくて困っているとの回

第7表 各地区の対策実施効果および対策課題（2012年）

地域	地区	対策実施効果			対策課題			
		被害 増加	被害 減少	変化 なし	参加人数 が少ない	高齢者 ばかり	運営費用 の不足	その他
竜 西	座光寺			○	○	○		
	飯田			○	○			
	伊賀良	○			○			新たな免許取得者が出ない、 若い人が免許を取らない、 死体の処理
	上郷							役員のための管理が中心で 一般会員の参加が少ない、 死体の処理
	山本	○			○			遊休農地の増加 ²⁾ 、 狩猟者が増えない
	川路 三穂							
	竜丘 鼎			○ ¹⁾	○			
	松尾			○	○			檻の設置者が少ない
	下久壁		○		○	○		
	上久壁		○					イノシシ、シカの死体の処理、 クマの捕獲規制
竜 東	龍江			○	○	○		死体の処理
	千代		○		○	○	○	
遠 山	上村		○					死体の処理（イノシシとクマ の死体の臭いに動物がつく）
	南信濃			○		○		規制による狩猟者の減少

注1) 昨年対策を始めたばかりである。

注2) 特に山に近いところが放棄されている。

（聞き取りおよび調査票による調査により作成）

答も得た。基本的に駆除を行った狩猟者が死体を持ち帰り、家庭で食すことになっているが、食べきれない場合は近所の住民や知り合いに分けることもある。しかし、山肉をもらった一般の家庭では、調理の仕方がわからず、食べずに冷凍庫の中に保存されている場合もあった。さらには、山肉屋などに売却している地区は、飯田市内の遠山地域、竜東地域の一部地区のみであり、これらの地区は山肉屋に近いため、死体を運ぶことが容易であった。しかし、山肉屋に近くない地区では、山肉屋へ死体を持っていくのに時間がかかるため、肉の状態が悪くなってしまうこと、死体を運ぶのに手間がかかること、という理由から山肉屋へ売却する処理方法は採用できない。また、土に埋めて処理する方法は、死体のにおいにクマやタヌキ

などの野生動物がひきつけられ、掘り返してしまう問題がある。伊賀良、上郷地区では、掘り返しにより地域住民からの苦情が協議会へ寄せられたり、上村地区ではクマが人里へ近づき危険なことがあったりする。このように、死体の処理方法は、対策を実施している各地区において、大きな課題となっている。

さらに、各地区の対策への要望を尋ねると、ほとんどの地区でより対策を実施したい、との回答を得られた（第9表）。その理由としては、有害鳥獣の出没が増加していることが主である。さらには、被害の増加により周辺の地区で積極的な対策を実施していることで、以前は獣害が少なかった地区に侵入するようになり、地区を越えて被害が広がっていることも理由として挙げられた。駆

第8表 各地区における死体の処理方法（2012年）

地域	地区	家庭で消費			山肉屋・飲食店・宿泊施設へ売却						土に埋める						その他				
		処理の有無	頻度	動物	処理の有無			頻度	動物	処理の有無	頻度	動物					処理方法	動物			
				イノシシ	シカ	クマ	山肉屋		飲食店			宿泊施設	イノシシ	シカ	クマ	イノシシ			シカ	クマ	サル
竜西	座光寺	○	時々 (10～6月)	○	○	○					○	時々 (7～9月)	○	○	○						
	上郷	○	捕れた時	○	○	○					○					○	○	○	カラス		
	飯田	○	毎回 (1～10月)	○	○	○					○	罌にか かった時						○	○		
	伊賀良	○	時々	○	○						○	毎回	○	○	○	○	○				
	山本	○	時々	○							○	毎回	○	○	○	○	○				
	川路																				
	三穂																				
	竜丘										○	毎回						○	○	カラス	
	鼎										○							○	○		
	松尾										○	毎回						○	○	カラス	
竜東	下久堅	○	毎回	○	○						○	毎回	○	○							
	上久堅	○	良質な 時期のみ	○	○	○					○	ほぼ全て									
	龍江	○	時々 (6～9月)	○	○		○		時々 (6～11月)	○	○	○	6～11月					○	キツネ	焼却 処理	鳥類
	千代						○		時々 (6～9月)	○	○	○	時々 (6～9月)	○	○						
遠山	上村	○			○		○	○	○	良質の ものが捕 れた時 (9～12月)	○	○	○	○				○			
	南信濃	○			○	○	○	○		ほぼ全て (90%)	○	○	○	○				○			

(聞き取りおよび調査票による調査により作成)

除は、その地区を担当している狩猟者により実施されているが、野生動物が隣の地区へ逃げてしまった場合、他地区の狩猟者の管轄内で駆除を行うことができない。そのため、飯田・上郷地区、三穂・川路地区、下久堅・上久堅・龍江地区については、各地区の狩猟者が共同で対策を行っている場合もあった。飯田市では駆除による対策が一般的であるため、駆除の担い手不足と駆除により発生する死体の処理といった問題がより積極的な対策を実施する上で阻害要因となっている。そのため、担い手である狩猟者の育成には、飯田市や上村地区などで、狩猟免許の取得や更新の補助、駆除に参加している狩猟者へ昼食代等を出すなどを行っている。また、農業従事者の中には、自身の畑を守るためにわな免許の資格を新たに取得する動きもある。しかし、わな免許のみを所持していても、わなで捕獲した大型野生動物を死滅する際には銃を使用する場合が多いため、銃免許を所

持している狩猟者の存在が必要不可欠となっている。

Ⅳ－２ 山肉屋での死体の活用

前節で問題となっていると述べた死体の処理方法について考察するために、その方法の一つである山肉屋での死体の活用がどのようになされているかについて、遠山地域に存在する3店舗の山肉屋へ聞き取り調査を行った。これらの山肉屋は、遠山地域に位置している（第1図）。各店舗の取扱獣種とその利用内容は第10表の通りである。

南信濃地区にある肉のスズキヤ（以下、スズキヤ）は、創業が1957（昭和32）年で、現在2代目の主人が経営している。従業員は、家族4人、その他18人の計22人である。敷地には、死体処理施設、店舗、事務所を所有しており、店舗と解体処理をする場所を分けることで衛生管理を行っている。スズキヤでは、家畜と同じように衛生管理を

第9表 各地区の対策への要望（2012年）

地域	地区	対策の希望	
		より対策をしたい	特になし
竜西	座光寺	—	—
	飯田	○	協議会の参加者が少なく、地域全体で真剣に取り組まないと、被害が増加してしまう
	伊賀良	○	サル、イノシシなどの出没が近年増加している
	上郷	○	シカ、イノシシは減少しているがサルの被害は増加、サルの対策がむずかしい
	山本	○	有害鳥獣の出没が多くなっており、被害農家数が増加している
	川路	—	—
	三穂		○ 要望が少ない
	竜丘	○	近隣の地区で積極的に対策を行っており、大型獣が入り込むことが予想される
	鼎	○	檻以外の対策、効果的な方法がわからない
	松尾	○	近隣の地区で積極的に対策を行っており、大型獣が入り込むことが予想される
竜東	下久堅	○	農作物への被害が多い
	上久堅		○
	龍江	○	頻繁に被害報告があるため
	千代	○	
竜山	上村		○ 狩猟者が少なくなり、捕獲実績が少なくなっているため、このまま対策をしなくなる予定
	南信濃	○	里にいらなくても次に新しい個体が里へ入ってくる。1ヶ所で捕獲しても別の場所から侵入するため、地区全体を囲うしかない

注）—は、無回答を表す。

（聞き取りおよび調査票による調査により作成）

第10表 飯田市における山肉屋の取扱獣種とその内容（2012年）

店舗名	取扱獣種			内容					
	シカ	イノシシ	クマ	料理提供	解体処理	精肉	味付け肉	惣菜など	缶詰
肉のスズキや	○	○	○		○	○	○	○	
星野屋	○	○	○	○	○	○	○		
清水屋	○	○	○	○		○	○		○

（聞き取り調査および下伊那地方事務所の「飯田・下伊那でジビエ料理（食材）を提供しているお店」により作成）

徹底し、食肉処理（家畜）と山肉の処理は別々に扱うことをモラルとしている。そのため、保健所による検査の他、独自に持ち込まれる死体ごとにカルテを作成し、管理している。さらには、処理施設では、搬入口から死体を入れた後、すべての工程が終わるまで搬出口から出さない、搬入口と搬出口は建物の反対側にあるため、処理前の肉と処理後の肉が一緒にならないなどの工夫がされている。

南信濃地区にもう1店舗ある山肉屋の星野屋

は、創業が1921（大正10）年で、前身は漢方で野生動物を扱っていた星野製薬である。従業員は家族2人、その他（パート従業員）2人である。しかし、主人の娘や息子が時々手伝いにくることもある。また、息子が近所で山肉を提供する居酒屋、主人の弟が民宿を経営しており、そこでも星野屋で扱っている山肉の料理を提供している。衛生面においては、他の店舗と同様に保健所による検査も行っているが、水道水を消毒用の水にろ過する装置（写真3）などの機器の導入や、2011年3月

の東日本大震災による福島原発の事故があったことから、独自に山肉の放射能の測定を行っている。星野屋では、山肉の販売の他、山肉料理を提供する料理屋も経営している。

上村地区にある清水屋は、当地区では唯一の山肉屋であり、1959（昭和34）年に、元々主人の妻が副業として創業した。現在の従業者は1人であり、2代目である嫁が主に従事している。2008年頃からは、主人の体調の問題により、山肉屋の営業としては、解体作業は行わなくなり、山肉の缶詰や味付け肉の販売のみとなっている。また、元々の創業者である妻も解体作業を行うことができなかったこともあり、創業当時から基本的には狩猟者に解体までの処理をしてから持ち込むように頼んでいたため、現在も解体処理をしてある山肉を仕入れている。清水屋は、山肉以外の肉としては、海外からの輸入ラム肉などを取扱っている。さらには、予約制で、山肉料理の提供もしている。

これらの山肉屋の仕入れ先は、飯田市および周辺市町村の狩猟者である（第8図）。スズキヤは、飯田市とその周辺市町村の特定の狩猟者のグループからのみ仕入れており、年間にイノシシ100頭、

シカ100頭、クマ3～10頭を取引している。また、基本的に山肉の仕入れ時期は、狩猟期である11月～翌年2月である。フランス料理レストランなどの卸し先から頼まれて夏期の山肉を仕入れることもあるが、必ず取引関係にある狩猟者に頼んで仕入れている。死体を持ち込む際に、事前に死体の洗浄、血抜き、内臓の除去、といった処理をしないとすぐに腐敗し死臭がついて、食することができなくなってしまうため、スズキヤでは、このような処理ができる狩猟者グループとのみ契約をしている。スズキヤでは、このように取引関係にある特定の狩猟者グループからのみ仕入れることで、質の悪い山肉を仕入れないようにしている。

一方、星野屋は、スズキヤと同様に死体を持ち込む際には、狩猟者が事前に処理をしてから持ち

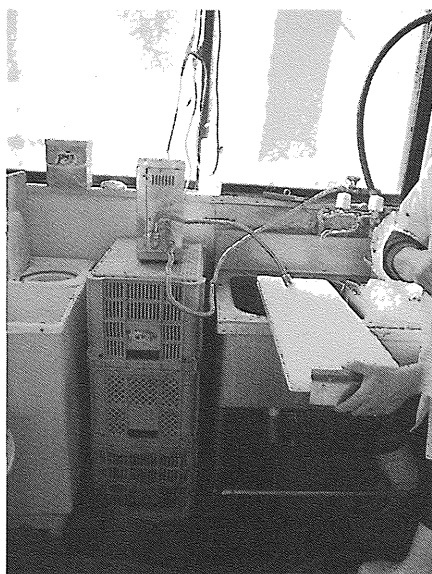
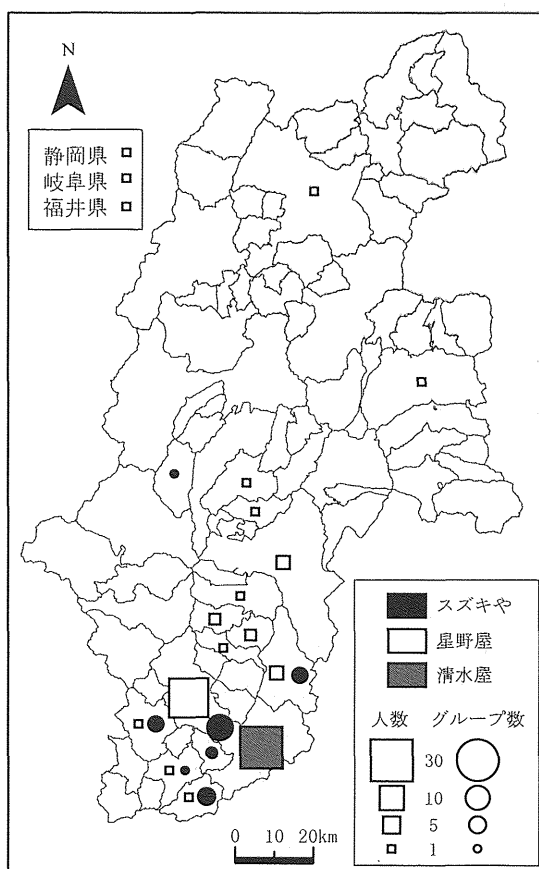


写真3 星野屋の水道水を消毒水にろ過する装置（2011）

（2011年10月 橋本撮影）



第8図 飯田市における山肉屋の仕入れ先の分布（2012年）

（聞き取り調査により作成）

込むのが基本である。しかし、中には運ぶのが大変なため、処理済みの山肉を狩猟者の元へ引き取りに行く場合もある。また、決まった取引相手は存在せず、持ち込みであっても受け入れているため、飯田市や周辺の市町村以外にも長野県内の他の市町村や県外の狩猟者からも仕入れている。また、受け入れる季節も特に決まっておらず、年間を通して受け入れている。これは、獣害にあっていいる地域で駆除を行う際に死体の処理に困っていることに配慮しているためである。しかし、状態の悪い肉が持ち込まれる場合もあり、食すのが難しいことがあるため、山肉を販売する前に加工を施すことで、これに対応している。すなわち、銃の弾が入っていた部分は入念に除去し、堅い肉はミンチにしてハンバーグに加工したり、カレーなど味付けを濃くする等、できる限り工夫している。さらに人間が食することができないような肉については、ドッグフードとしてジャーキーにして販売することも行っている。仕入れ量は、2010年11月～2011年2月の狩猟期には、イノシシ120頭、シカ240頭、クマ45頭、翌2011年11月～2012年2月には、イノシシ20頭、シカ200頭、クマ3頭であった。

これら2店舗と異なり、清水屋は、上村地区の狩猟者からのみ仕入れている。以前は他の地域の狩猟者から仕入れることもあったが、現在では上村地区内の狩猟者からの持ち込みがほとんどである。また、スズキヤと同様に清水屋では狩猟期にのみ仕入れており、質の悪い肉は狩猟者に持ち帰ってもらっている。また、販売する前に家族で賞味することで質を判断するなど肉の質に注意を払っている。また、仕入れは、狩猟者の持ち込みに任せており、積極的な受け入れは行っていない。ただし、年間の缶詰・味付け肉の生産販売ができるだけの肉の持ち込みは維持されている。

これらの山肉の販売先は、主にフランス料理やイタリア料理等のレストラン、またこれらの料理を提供する料理店を有するホテル、産直市場である(第11表)。スズキヤは、肉の仕入れ先と同様に卸し先も提携を結んでいる長野県、静岡県、愛

第11表 山肉屋の卸し先 (2012年)

店名	レストラン(件)	ホテル(件)	産直市場(件)
スズキヤ	41	5	0
星野屋	230	0	0
清水屋	0	0	2

(聞き取り調査により作成)

知県、東京都、大阪府、兵庫県、沖縄県の特定のレストラン、ホテルのみである。特に、長野県、静岡県、愛知県で約76%を占めている。また、星野屋では、特に提携を結んでいないが、常連の顧客であるレストランが存在する。そのほとんどが東京都であり、次いで愛知県、大阪府、京都府といった大都市に位置している。その他、北海道、神奈川県、埼玉県、茨城県、岐阜県、長野県、静岡県、三重県、兵庫県、広島県、福岡県、鹿児島県にも卸しており、全国のレストランから注文が入っている。一方、清水屋の場合、産直市場にのみ卸しており、長野県と静岡県の2県のみであった。清水屋の山肉は、缶詰を年間150個、味付け肉を年間100袋程産直市場で販売されている。この缶詰は、1995年から清水屋の主人が独自の味付けでイノシシ、シカ、クマの肉を販売し、店の人気商品となっている(写真4)。

また、スズキヤでは、1994年に運送業者のクール便により本格的に全国へ発送、2000年にインターネットでの販売を開始した。これにより、全国の一般客へも販売を広げるようになった。さら



写真4 清水屋の缶詰 (2012)

(2012年5月 橋本撮影)

には、2002年には全国の百貨店で物産展で販売も開始しており、山肉の一般大衆への普及を行う努力もしている。一方、星野屋では、店舗でも料理を提供しているため、TVやインターネットでの紹介や、口コミにより新たな一般客への普及に成功している。さらには、リピーターが多数おり、毎年固定客の来店や、郵送依頼にこたえて全国へ発送もしている。

以上、山肉屋による死体の活用についてみてきたが、各店舗とも山肉を食することを普及するため、工夫を行っている。スズキやは、質の良い山肉を仕入れるために、基本的に狩猟期の肉のみを仕入れ、駆除による死体の受け入れはなかった。これは、有害駆除の肉を使用することは、消費者に対して印象が悪く、良質な肉ではない場合があるからである。おいしい肉を食べないと山肉が普及しないと考え、リピーターを増やすためにも山肉のブランド化を重要視している。星野屋は、駆除による死体の受け入れを行っているが、それは現場で死体の処理に困っていることを勘案したためであった。しかし、質の良い肉を提供したいという考えはスズキやと同様であるため、肉の質については、販売する際に加工を施すといった工夫を行うことで問題を解決することに成功している。すなわち、銃弾が入っていた部分の入念な除去、堅い肉を柔らかく食べる工夫、味付けの工夫などである。さらに、人間が食することができない場合は、ドッグフードとして販売することで、肉を無駄なく活用している。清水屋にしても、山肉の質については、2店舗と同様に考えており、質の良いものを客に提供しなければ、山肉の需要が広がらないため、狩猟期以外での仕入れはしていなかった。

V 飯田市における獣害対策の諸問題

ここまで、現代における飯田市の獣害対策とその課題について分析してきたが、獣害対策の問題点としては主に次の3つにまとめることができる。それらは、①担い手の不足、②駆除以外の有

効な対策がないこと、③駆除により発生する死体の処理方法が確立されていないこと、の3つである。これらは、全て対応策としての駆除に関連して引き起こされていると考えられる。

①は全国の獣害に悩む地域で同様にみられるが、飯田市の場合、駆除が主な獣害対策であるため、狩猟者の高齢化と若者の狩猟免許保持者の少なさ、狩猟免許の規制強化による免許の更新の難しさに加え、狩猟者が駆除を行いやすい環境が整っていないことが問題となっている。人里へ出てくる野生動物の数が増加しているため、駆除の増加にともない、現在的人数では対応しきれなくなっている。また、市街地に近い地域では、駆除に対する地域住民の理解がなかなか得られないため、死体の処理だけでなく銃を使用することに対して、苦情などが寄せられることもある。

また、②のように駆除以外の対策の実施については有効な手段が確立できていないため難しい。上久堅地区で、林道沿いに防護柵を設置することで、獣害の減少につながった場合もあった。また、千代地区では、上久堅地区と同様に防護柵を設置する動きがある。しかし、全ての地域でこの対策ができるかという点、資金や設置場所、管理の問題があるため難しい。さらには、防護柵を設置している地区の周辺地区に野生動物が侵入するようになっており、地区を越えて共同で対策に取り組む必要がある。飯田市では、個人に対して電気柵や防護柵を設置するための補助をしている。しかし、個人の田畑だけを防護しても、地区内への野生動物の侵入を防ぐことはできない。

③は、駆除を対策の中心とせざるを得ない現状でどうしても生じてしまう問題である。そのため、各地区で食することができる場合は、家庭や山肉屋などで利用するようにし、食することができない場合は、山や田畑の近くに埋めて処理をしている。しかし、一般家庭での食利用は、食べきれなかったり、食べ方がわからないため進んでいない。また、山肉屋での売却に関しても、山肉屋との距離、季節的な制限、駆除死体の受け入れの少なさなどがあるため、なかなか進展しない。そのため、

死体の処理方法が確立できていない。これを受けて、飯田市では、シカ肉のペットフード研究会を立ち上げ商品の開発に取り組んだり、2010、2011年には、一般市民への獣害対策の普及をねらった獣害対策講習会とジビエ料理を紹介するイベントを実施している。しかし、食することのできない死体の処理については、依然として埋めて処理する以外に方法がなく、今後の課題となっている。

Ⅵ おわりに

本稿では、飯田市の獣害とその対応策について、駆除が行われてきた歴史的な背景と現代の対応策を整理し、獣害対策の諸問題として担い手の不足と死体の処理があることを、各地区の協議会への聞き取りおよび調査票による調査と山肉屋への聞き取り調査から明らかにしてきた。

飯田市の獣害対策としては、江戸時代から続く狩猟文化から、銃やわなを使用した駆除が発達してきた。そのため、獣害対策の担い手である狩猟者の存在が重要である。しかし、狩猟者の高齢化や若手狩猟者が少ないことの他に、人里へ出没する野生動物が増加しているため、対応が追いついていない現状がある。一方、対応策をより行おうとすると、主に駆除しか方法がないため、担い手である狩猟者にさらに負担が生じてしまう。さらには、駆除が増加するとそれにともない発生する死体の処理の問題が浮上する。現在行われている死体の処理方法が、食することのできる野生動物とできない野生動物によって異なっており、食することができる場合は、死体の処理方法は多様であるが、食することができない場合は、埋める以外に方法がない。食することができない場合、埋める場所が問題であり、市街地の近くでは、野生動物の掘り返しによる悪臭や衛生面での心配。さらには、

クマなどの野生動物をさらに人里へ誘引する要因となってしまう恐れがある。しかし、山の中に埋めるには、運搬コストや財産区など山の所有関係の問題もあり、簡単ではない。そのため、飯田市の今後の獣害対策には、駆除以外の対応策の推進、地域住民への獣害対策への啓蒙普及、死体の処理方法の確立、が重要になってくる。田畑を作っている農家だけでなく、集落単位で電気柵や防護柵の設置・管理ができるようにするなど、集落での取り組みも重要である。また、死体の処理方法として、食することのできない死体は、専門の焼却所を設けたり、死体を安心して埋めることができる場所を確保するなどの対応も必要である。これらの対応には、地域住民から理解を得る必要があるため、啓蒙普及活動も重要になってくる。その一つとして、地域住民に対する獣害対策講習会と山肉を普及するためのジビエ料理の紹介は、地域住民への獣害対策への理解を広める他、食利用としての死体の処理を進める一端を担っている。さらに、飯田市では、南信州地域（飯田市および下伊那郡を含む地域）の山肉屋や山肉料理屋を紹介したパンフレットを飯伊連合猟友会、下伊那地方事務所と共に作成し配布している。そもそも飯田市は山肉を食す文化が従来からあったが、狩猟者や高齢者などの家庭以外では、食されることが少なくなっている現状がある。飯田市の獣害対策は、農家や狩猟者以外の地域住民とも協力していくような集落単位での取り組みが必要である。さらには、地区を越えて周辺の地区とも協力することで、情報の共有や大規模な対策を実施できる他、担い手不足を互いに補い合うなど、より有効で広域な獣害対策に取り組むことができる。そのためにも、まずは集落内での協力を得る必要があるため、地区住民への理解を得る取り組みが課題である。

本研究を進めるにあたり、飯田市林務課、農業課の方々をはじめ、長野県下伊那地方事務所農政課 大沢美帆氏、林務課 竹松清志氏、長野県下伊那農業改良普及センター 伊藤博之氏、JA みなみ信州 小林正和氏、飯田市連合猟友会 矢澤弘富氏、JA みなみ信州上郷支所 細田英治氏、上久堅地区農業振興

会議 中山将英氏、上久堅地区まちづくり委員 長谷部徳治氏、龍江地区猟友会 金山亮男氏、上村振興公社 前島道広氏、南信濃自治振興センター 木下博圓氏、16地区の有害鳥獣対策協議会役員の方々、肉のスズキや 鈴木 理氏、星野屋 片町 彰氏、清水屋 清水八千男氏とご家族の方、飯田市歴史研究所の方々、北方古老に聞く会 新井利彦氏、各地区の居住者の方々には多大なるご尽力を賜りました。記して御礼申し上げます。

なお本稿は、日本学術振興会平成23年度科学研究費補助金（23・509）による研究費の一部を使用しました。

[注]

- 1) シシとは肉を意味し、イノシシ、カノシシ（シカ）、クラシシ（カモシカ）などの狩猟の対象物の名称とされている（矢ヶ崎，2001）。
- 2) 養殖したシカやイノシシなどの肉を狩猟や駆除をした野生動物の肉と同様に山肉として扱う場合もあるが、本稿では、狩猟や駆除をした野生のシカやイノシシなどの肉のことを山肉とする。
- 3) 山肉屋は、野生や養殖に関わらず、シカやイノシシなどの肉を扱っている精肉店のことを指す。本稿では、狩猟や駆除をした野生のシカやイノシシなどの肉を扱う精肉店を山肉屋とする。
- 4) これらの獣害対策事業は、総合対策交付金、国庫により賄われており、国の事業である。

[文 献]

- 伊賀良村史編纂委員会（1973）：猪対策。伊賀良村史編纂委員会編：『伊賀良村誌』伊賀良村史刊行委員会，556-557。
- 市村絵里（2002）：山村における野生動物の食肉利用－長野県下伊那郡上村・南信濃村を事例に－。筑波大学大学院生命環境科学研究科修士論文。
- 浦山佳恵（1999）：長野県の猪垣。長野県自然保護研究所紀要，2，129-134。
- 浦山佳恵（2001）：下伊那郡上村におけるニホンジカと住民との関わり。長野県自然保護研究所紀要，4，別冊1，281-292。
- 上久堅村誌編纂委員会（1992）：猪、鹿の防止。上久堅村史編纂委員会編：『上久堅村誌』上久堅村誌刊行委員会，354-356。
- 北原 寛（1932）：飯田地方の猪土手－木曾山脈東南麓に残存せるもの。信濃，1，423-426。
- 田口洋美（2004）：マタギ－日本列島における農業の拡大と狩猟の歩み－。地学雑誌，113，191-202。
- 高橋春成（1980）：猪肉の商品化－中国地方を事例として－。史学研究，149，73-90。
- 千葉徳爾（1961）：箕輪領長岡村の猪鹿被害と入会林野。伊那路，5（11），1-5。
- 千葉徳爾（1966）：伊賀良北方の猪垣論争。伊那，14（1），6-11。
- 寺本憲之（2010）：住民の合意形成によって被害防止柵をつくる－現代版のシシ垣づくりにむけて。高橋春成編：『日本のシシ垣』古今書院，320-344。
- 野本寛一（1984）：害獣との戦い。野本寛一著：『焼畑民族文化論』雄山閣，162-182。
- 南信濃村史編纂委員会（1976）：生業。南信濃村史編纂委員会編：『南信濃村史 遠山』南信濃村，474-475。
- 向山雅重（1984）：木曾山脈南東麓の猪土手，向山雅重著：『伊那農村誌』慶友社，167-174。
- 矢ヶ崎孝雄（1989）：猪垣（ししがき）の分布について。文教大学教育学部紀要，23，11-22。
- 矢ヶ崎孝雄（2001）：猪垣にみるイノシシとの攻防－近世日本における諸相－。高橋春成編著，『イノシシと人間－共に生きる』，古今書院，122-170。